

『質的心理学研究』編集委員会企画シンポジウム

身体を見る・身体に触れる・身体を感じる

企画：好井裕明（日本大学）、宮内洋（群馬県立女子大学）

司会：宮内洋

話題提供：前田拓也（神戸学院大学）

細馬宏通（滋賀県立大学）

増田展大（立命館大学ほか非常勤講師）

指定討論：好井裕明

第32回オリンピック競技大会および東京2020パラリンピック競技大会の開催年、すなわちオリンピック・イヤーである2020年に発行予定の『質的心理学研究』第19号の特集は「身体を対象にした、あるいは、身体を介した/通した質的研究」と決定している。この特集の責任編集を務める好井裕明氏と筆者、宮内洋が、本企画シンポジウムを、本学会誌第19号特集と連動させて企画した。今年度の日本質的心理学学会第14回大会のテーマは「からだとことば」であるが、これとも連動・呼応している。

学会誌特集の企画趣旨で述べたように、日本質的心理学学会も規模が大きくなり、会員も多様性に富むことから、会員同士の専門的なコミュニケーションが困難になっている側面も散見される。そこで、最大公約数として「身体」というテーマを打ち出し、異なるディシプリン、異なる研究視角および方法論から、「身体」に関する研究について、学会大会の場で刺激的な議論を展開することを念頭に置き、学会員のみならず、開かれたかたちで本シンポジウムを企画した。（文責：宮内洋）

「自立する障害者」と介助者の身体

前田拓也

地域で「自立生活」——施設を出て、家族による介護にも依らずに暮らす——を実践する身体障害者たちがいる。そして、かれらの日々の暮らしをアシストする「介助者」という存在がある。

介助者にとっての仕事は、まずは障害者たちの日常的な「必要」をもとにした指示を聞き取り、それに可能なかぎり忠実に従い、実現しようとするところからはじまる。（ときに「重度」の）障害者たちの多くは、日々の「自立」した暮らしのなかで、これまでしばしば他者——健常者——に無視されたり先取りされたりしがちであった自分の意思や意向が尊重され、実現されることを重視する。そんな障害当事者たちの自立生活にとって、介助者はあくまでも「黒子」的存在なのであって、可能なかぎり後景に退くべきであり、そこに健常者としての意思が入り込んではいならない。こうした理念は、ときに「介助者は障害者にとっての手足の延長である」（「介助者手足論」といったかたちで表明される。もちろん、そう「見なす」ことをすれば実現できるといった単純なものはなしではないし、そのようなことが現実的に可能なのかということそれ自体にも、当然検討の余地は常にあるのだが、原則としてまずはそうなっている、そこからスタートしてみるということである。

一方で、「自立生活」という実践と、介助者としてそれにかかわるということ自体が、あくまで障害者運動の一貫であるという観点からすれば、介助者が、ただ透明なメディアとして「生活をアシストすること」のみを求められているわけではかならずしもない。介助者/健常者が、介助という経験を通

して求められているのは、それ以前には「あたりまえのもの」としてあったはずの、自身の身体性の変容を経験することである。

では具体的に、「自立する障害者」との関係性において、介助者/健常者の身体は、どのようなことが求められているのか。とくに報告者自身の「介助者としての経験」を検討することを通して、その一端を考察する。

身体動作を分節化する -再生装置としての ELAN の可能性-

細馬宏通

身体動作研究においては、身体動作を細かく分節化し、その時間構造をコーディングする作業がほとんどの研究において必須となってきた。そのプラットフォームとして代表的なものに ELAN がある。この発表では、音声と身体動作を分節化し、断片を何度も再生するという作業が動作研究に何をもたらしつつあるのかについて紹介するとともに、この方法の問題点を考える。

身振りはどうのように見えるのか——映像史の観点から

増田展大

本報告では「身体を見る、感じる」ことについて歴史的な観点から、とりわけ映像史との関連において再考してみたい。

身体を映像に記録する実践は、1895年の映画の登場にさかのぼることができる。それと前後して、同時代の科学者たちは、人間の基本的な身振りを写真や映画のフィルムに記録するという作業に熱狂的なまでの態度を示していた。というのも、一秒以下の露光時間を可能にした瞬間写真は、それまでには見たことのない姿勢やポーズの人々を映し出すことに成功したからである。このことが連続写真をはじめとして、映画というメディアの直接の起源となったことはよく知られている。だが、フランスに限ってみても、興味深いことに、J.M.=シャルコーや E.=J.マレーらによる著名な事例のみならず、M・モースやG・タルドなど、医学や生理学、人類学や心理学などの分野を問わずして、映像技術がアスリートや労働者たちの身振りを分解する科学的な分析手段として採用されていた。

つまり、身体の動きをめぐる研究が領域横断的な位置付けを獲得するにあたって、映像技術が果たした役割は決して小さくなかったと言える。では、こうして身体の運動とその映像による分析が結びついたとき、人々の身体に対する認識にはいかなる変化が生じたのであろうか。映像に媒介された身振りを歴史的に検討することから、現在に身体を見たり、感じたりする私たちの実践を再考するきっかけとしてみたい。

文献

細馬宏通 2014 『うたのしくみ』 ぴあ

細馬宏通 2016 『介護するからだ』 医学書院

前田拓也 2009 『介助現場の社会学』 生活書院

増田展大 2017 『科学者の網膜：身体をめぐる映像技術論:1880-1910』 青弓社